おわりに

本検討によって、橋梁に流木が集積した場合の水位せきあげを精度よく推定することができた。実河川においては上流からの流木流出量の見積もりを定量的に行うのは困難であり、河道内の各橋梁で流木集積が生じないようにすると流木が海に直接流出するという問題も生じることから、どのような洪水でも完全に河道内に閉じこめることは現実的には不可能と考えられる。しかし、上流域の地形・地質及び河畔林の繁茂状況や被災歴等から流木集積に関して定性的判断は可能であり、ある程度の洪水氾濫を許容させるという考えの上に立つと、上流域の治山や河道内河畔林の保全は勿論、河道内では各橋梁での流木集積を見越した水位せきあげに基づく堤防高の設定、堤内氾濫域での土地利用規制等が重要な対策となってくる。つまり、本検討は、河道計画だけでなく流域計画にも関わる重要な要素として位置付けられると言える。

本検討は、「橋の径間長等に関する検討委員会」の一環として行った水理実験の結果の一部を取り纏めたものである。この実験を担当した、パシフィックコンサルツ（株）の浜口氏、平林氏には膨大なデータの整理を手伝っていただいた。ここに厚く謝意を記す。